

東日本大震災災害活動報告

3.11を心に刻み亙理町消防団は復興を誓います

宮城県亙理町消防団 団長 森 義里



東日本大震災は、一瞬にして亙理町民の平穏な生活、そして多くの尊い命を奪い去りました。

平成23年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0、震度6弱の地震が発生し、宮城県沿岸に大津波警報が発令され、亙理町では沿岸部に避難指示が出されました。

我々消防団は近い将来発生すると予測されていた宮城県沖地震に備え、震度4以上の地震が発生した場合は自動的に出動し、各分団長の指示により住民の避難誘導の任務につくことと定めておりました。

この避難誘導については、毎年6月に亙理町総合防災訓練を実施していたこともあり、消防団員は自主防災組織の一時避難誘導場所や保育所、児童館などから、それぞれの役割ごとに町の避難所への誘導をいたしました。しかしながら、このたびの大津波は消防団員も予想できないほどの大きさと勢いで襲い掛かってきました。



(避難誘導後流出した積載車)

死亡者255名、行方不明者7名、全壊家屋2,359棟、浸水面積約35km²(町全体の47.8%)、消防ポンプ車2台、小型ポンプ積載車14台、詰所の全壊9箇所、殉職者1名(6月21日現在)と過去にない甚大なる被害となったのです。

大津波後の消防団員の活動は大変過酷なものとなりました。まず、地域住民を誘導した、荒浜小学校、荒浜中学校、荒浜支所、長瀬小学校、農村

環境改善センターが津波浸水により孤立してしまったことにより、沿岸地域の団員は避難民と一緒に、真っ黒な海水と流出した家屋や大木、漁船などに囲まれ身動きがとれず救出を待たなければならない状況となりました。

震災当日は大変寒く、停電に断水、救助のため濡れたままの活動服や法被のまま住民の安全確保を第一に3日間避難民とともに過ごした団員もいます。今思うと消防団員としての責任がそんな行動になって表れたのだと思われま



(荒浜地区の航空写真)

震災翌日からの救助活動は、自分たちの町とは思えないほど見るも無残となった光景、2階から聞こえる救助を求める声。がれきが覆い重なる道路、そして針金や釘、ガラスなどが沈む海水に2次被害の恐れから近づけないもどかしさ。自宅は全壊、家族とも連絡の取れないまま活動する団員。その活動は想像を絶するものであり、本来であれば東北一の生産量を誇る「いちご」の出荷の最盛期を迎える時期からの急転直下でした。

孤立した避難所からの救助もまた困難なもので、すべての移動が終了したのは震災3日目のことでした。消防団員が舟やトラックなどを駆使して寝たきりや足の不自由な老人などを含む約800名の避難民を、凍るような冷たさの海水に浸かりながら無事に搬送しました。

また、本町は今回の震災で役場庁舎が甚大な被害を受けました。本来ならば災害対策本部を設置



(流出した出荷用のイチゴ箱)

する場所が機能しない非常事態となりました。町職員は外にテントを張り、発電機と投光器で明かりをとり、通信手段の電話はまったく機能しない陸の孤島状態。消防団員も連絡調整は口頭でするしかありません。衛星電話が届くが、正確な情報は入らず、現場からヘリで何人もの住民が搬送されているようではあるが、行き先がはっきりわからないような状態。そして、まったく予想していなかったガソリン不足。緊急車両以外はガソリンが入れさせられず、町には住民から苦情が殺到しておりました。我々消防団も積載車やポンプ車の半数近くが津波により流出したため、家用車を使用して捜索活動をせざるを得ないが、ガソリンを入れるのも回りに気を使い緊急車両と一緒に給油するような状況でした。



(捜索前の現地本部での作戦会議)

そして、震災から2週間は、あっという間に過ぎていったように感じられましたが、何がどうなっているのかさっぱりわからないというのが本当のところでした。地震発生後、活動服に着替え出勤し、その後自宅が流され帰ることもできず、身に着けるものは消防団の活動服に長靴だけ、捜索活動のため避難所から捜索現場に向かい、夜は断水のため風呂にも入れず、夕食後寝るだけという生活の日々。それから約2ヶ月にも及ぶ行方不明者の捜索活動は、これまで体験したこともないこと

ばかりでした。毎日、遺体を発見しては確認し、警察や自衛隊に報告するという作業。何十体もの遺体が搬送される日もありました。



(がれきの中での捜索活動)

しかし、この様などん底の状況で私達を力強く支援していただいたのが、愛知県緊急消防援助隊と陸上自衛隊第10師団の皆様方でした。まったく知らない土地に来て、地元消防団員と一緒に捜索していただいたこのご恩は言葉には表せないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。



(愛知県緊急消防援助隊解散式)

現在、3ヶ月が過ぎ行方不明者も減少しております。がれきの山に田植えのしていない田んぼ、陸に上がったままの漁船。枯れ果てたいちご畑。

しかし、職を失った消防団員も何とか就職し、がんばっております。町外に移り住んだ団員もいます。しかし、故郷の復旧・復興はみなが願うことです。元のように農業がしたい。元のように漁業がしたい。元のように電車で通勤したい。そして、元の場所に住みたい。そんな素朴なことでも、今の私たちにはとてつもない夢となっているのです。互理町消防団員は現在バラバラかもしれませんが、～ONE FOR ALL・ALL FOR OEN～「一人はみんなのために、みんなは一人のために」故郷 互理町、そして互理町消防団の復興のためともに力をあわせてがんばって行きたいと心に誓っております。

全国からご支援いただき大変ありがとうございます。